

「ナイロンの衝撃」と日本の蚕糸業の衰退-アメリカ市場の変容と GHQ によるデザイン育成- / 平野恭平・牧田久美 21 巻 2 号、21-38 (2017)

アメリカのデュポン社によって発表されたナイロンは、最初の用途として生糸の最大の用途であったフルファッション靴下に展開したことから、生糸への影響が懸念された。その懸念は現実のものとなり、ナイロンはフルファッション靴下で生糸を駆逐することになり、日本蚕糸業を衰退へと追いやることになった。ナイロンの影響として、日本での合成繊維の研究開発が進んだことは明らかにされてきたが、直接的な影響を被る日本の蚕糸業やその重要な輸出先であったアメリカ市場の変容については、十分に考察されてこなかった。復興政策の中でも、生糸輸出の不振について、アメリカ市場でのナイロンの躍進が指摘されるにとどまってきた。本稿では、ナイロンの影響を否定するものではないが、ナイロンの登場があたかも日本蚕糸業の衰退要因のすべてのように語られることに疑問をもつものであり、1930 年代末から 1950 年代初頭のアメリカ市場でのナイロンの展開と生糸への影響を考察する。ナイロンが完全な生糸の代替繊維でなかったことを踏まえるなら、戦後の生糸・絹織物輸出の停滞は、ナイロンの登場という外生的な影響だけではなく、レーヨン台頭以来、日本蚕糸業に付きまどってきた生糸・絹織物の商品価値の向上という課題にも目を向ける必要がある。この課題に取り組みながらも、これまでの政策史の研究では見落とされてきた GHQ による復興過程での絹織物輸出をめぐるデザイン育成についても検討する。